大手前大学｜大手前短期大学

2024年度 前期 公開講座　後援：西宮市

阪神間の100年の歴史〈前編〉

第1回　4月13日(土)　川口 宏海（かわぐち ひろうみ）　大手前大学 副学長・教授

阪神間の歴史とその特色

阪神間の100年史を語るうえで必要な明治に至るまでの歴史的背景を概説し、地域史上の特色などを指摘します。この地域は、旧石器時代から祖先が暮らしてきたところです。奈良、京都、大阪の政治的中心地に近く、その影響下にあり続けます。古代には、高僧行基が活動し、中世末期には、地元武士荒木村重などが活躍します。近世には天領や尼崎藩などがおかれて、幕府の西国支配の一角を担います。また、伊丹、灘・西宮は江戸向けの酒造業が発達します。近代に入ると、伊丹･尼崎･西宮は国際港湾都市神戸とともに鉄道と海路で結ばれ､大阪の近郊都市として､より発展しました。

1978 年佛教大学文学部史学科卒業。1981 年同大学大学院文学研究科博士前期課程修了（文学修士）。1985 年同大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。大手前大学社会文化学部教授、同大学現代社会学部教授を経て、2022 年 4 月より同大学副学長。伊丹市立博物館協議会委員長、伊丹市文化財審議委員会委員長、尼崎市文化財保護審議会委員などを歴任。専門は日本史、日本考古学。著書に『集う：夙川・知の散歩道：知る・出逢う・辿る・詠む』、『時空をこえて：変貌する社会と文化』など。

第2回　5月11日(土)　藤本 幹也（ふじもと みきや）　大手前短期大学 ライフデザイン総合学科 教授

駅舎のデザイン変遷とこれからの役割

駅舎はこれまで多くの人々に馴染み深い建物として利用されてきました。また現在の駅の利用者は、年齢・性別・国籍問わず多様化してきています。今回の講座では、駅舎の様々なデザインや機能に着目し、過去から現在に至るまでどのように変化してきたのかを紹介するとともに、多くの駅舎の事例を通して、これからの駅舎のありかたや課題について皆様と一緒に理解を深めていきたいと思います。

大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士後期課程修了、博士（工学）。2000 年より大手前女子短期大学（現：大手前短期大学）生活文化学科に勤務。2021 年 4 月より同短期大学ライフデザイン総合学科教授。専門分野はユニバーサルデザイン、医療・福祉施設における避難・安全計画に関する研究、車いす・福祉機器に関する研究など。

第3回　6月8日(土)　仙海 義之（せんかい よしゆき）　公益財団法人阪急文化財団 理事

小林一三が想い描いた「宝塚」

小林一三(1873-1957)は、1910年に現在の阪急電車宝塚線を開業すると、ご乗客獲得策として終点の宝塚に観光資源を集中させます。そしてその中から芽生えた｢宝塚少女歌劇｣を大輪の花に育てるとともに、遊園地・動植物園・ホテルと様々な旅客誘致施設を展開し、｢宝塚｣を家族が1日楽しく過ごせる遊覧の地に造り上げました。一方のターミナル「梅田」を賑わせた百貨店や映画館・劇場が都市の文化だとするならば、「宝塚」に栄えたのは郊外の文化だと言えるのでしょうか。｢宝塚｣をめぐる沿線のトポスを考えてみたいと思います。

1962 年、神奈川県生まれ。東京芸術大学大学院修了後、同大学非常勤講師、香雪美術館学芸員等を経て現職、公益財団法人阪急文化財団理事、逸翁美術館・小林一三記念館・池田文庫館長。兼務として、大阪大学非常勤講師（博物館学）。専門は、日本・中国の中世絵画史。美術史学会会員。また職位に関連して、小林一三に関する講演なども多数行っている。

第4回　7月13日(土)　赤楚 勝司（あかそ かつじ）　阪神甲子園球場 球場長代理

開場100周年を迎える阪神甲子園球場の歴史と次の100年像

100 年の歴史を通して野球の聖地となった「阪神甲子園球場」。壮大な誕生プロジェクトから始まり、スポーツのメッカとなった昭和の姿や平成の大リニューアル、令和を迎えた今の姿など、その歴史を振り返るとともに、2022 年 8 月から展開されている 100 周年記念事業を通じて目指す次の 100 年に向けた将来像を紹介します。

1999 年同志社大学法学部卒業。阪神電気鉄道株式会社に入社し､2007 年まで人事部に所属。2008 年以降､阪神グループのベースボール事業に携わり、2020 年 4 月に阪神甲子園球場球場長代理に就く。開場 100 周年事業の主担当者。

阪神間の100年の歴史〈後編〉は以下の日程で開催予定です

9月8日(日) ／ 10月12日(土) ／ 11月9日(土) ／ 12月14日(土)

※各回 10:00～11:30

◀公開講座についてはこちら